

ズに対応できる。また重大な伝染病が発生した場合は、対応できる装置も開発している。これは移動が容易であり気象に応じた非凍結地域用と凍結地域型の2つのタイプを用意している。

(7) 耐震設計

水道管などの耐震設計により、東日本大震災時の地震に対しても影響を受けなかった。

納入先での評価等

第1号機を設置した(株)ジェネティクス北海道・十勝清水種雄牛センター次長（診療統括）の高橋健一獣医師は「イニシャルコストはかかったが、これまで心配だった冬場の防疫体制を整備することができた」と評価している。

今後の展開

(株)アクトは農業施設の専門メーカーであり、十勝農業施設においてトップのシェアを持つ。「すべてはお客様のために」が会社

の理念である。

伝染病などの病気が発生しないことが一番だが、万が一発生しても、この装置を使うことにより口蹄疫などの感染拡大を防ぎ、早期沈静化に貢献できること信じて開発した。研究機関をはじめ、家畜市場、農協、公共牧場、診療所、保健所等の畜産関係機関はぜひ設置されるように働きかけたい。本装置を基本としてダイズやジャガイモ等の運搬集荷時に問題となっているシストセンチュウなどの土壌伝染病対策の消毒にも効果を発揮する装置の開発を行った(特許申請済)。

さらに、今回の東日本大震災で問題となっている車に付着した放射能物質の外部流出をこの消毒装置により確実に除去し、危機的状況である日本の農業・食文化を救う一端として貢献していきたい。

(たなか いちろう・帯広畜産大学 地域連携推進センター産官学連携コーディネーター/うちうみ ひろし・(株)アクト代表取締役)

トピックス

TOKYO Xアソシエーションの植村光一郎会長がカナダで講演

東京生まれの銘柄豚「TOKYO X」の流通組織・TOKYO X-アソシエーションの植村光一郎会長は、このほど、カナダ・アルバータ州のトローチョ市、エドモントン市、カルガリー市の3ヵ所でTOKYO Xのブランド化についての講演を行った。

植村会長によると、「TOKYO Xのブランドイメージの創造とマーケット」とのテーマで開かれたこの講演会は、駐日アルバータ州政府が主催するカナダ産農産物販促普及活動の一環。日本からは植村会長のほか、高瀬物産の高瀬知康副社長も参加した。

植村会長の講演は、「TOKYO X」の開発・ブランド化の経緯、おいしさの追求、流通、食育の取り組みなどに広範囲に及んだ。この

うちブランド化に関して「牛肉の輸入が自由化されたとき最も影響を受けたのは牛肉ではなく豚肉だった。当時、日本の養豚農家は産肉性や生産効率ばかりにとらわれ、肉質に対するコンセプトがはっきりしていなかったために、大きなダメージを受けた」と振り返った。

その上で、「TOKYO X」がおいしさを追求するという明確なコンセプトをもって市場に投入したこと、「安全」「家畜の活力」「アニマルウェルフェア」「品質」の4つの理念を明確化したこと、生産者だけでなく流通業者や消費者と一体となってフードチェーンを構築していることなど、ブランド確立に向けた取り組みを披露。受講したカナダ側から多くの共感を得たという。